

2020/01/06 群馬大学小林研究室 桑名杏奈

4カ月も経ってしまった今さら報告書も何もないことは承知のうえである。一応、書きたい書きたいと思ってはいた学会直後はしかし、ギリギリ綱渡りの運営を思い出して冷や汗をかいたりやら、ギリギリ運営にってしまった自分への自己嫌悪やら何やらで、まともに報告書を書く余裕がなかったのである。という言い訳を以て後回しにしていたのである。2019年年末にTJCAS2019に来てくれたお茶大・日大の学生さんの指導教員と会って、当時の話題が少し出たことを機に執筆のモチベーションが間欠泉の如く噴出、収まる前によし書こうと思った次第である。本当に今さらである。

報告書の意図は、小林先生のメールを引用させて頂くと、以下のとおりである。

学会が終わるとそれはどのようなものであったかの
報告の情報が少ないように思いますので、新しい試みとしまして
様々な方々に、主観も交えてもらいながら
どのようなであったかを記録に残したいと思っています。

TJCASに参加なさった様々な方が、既に各々の個性あふれる素晴らしい報告書を書いてくださり、以下に掲載されている。学会期間中の雰囲気を知りたい方は、私以外の報告書をご覧いただきたい。

<https://kobaweb.ei.st.gunma-u.ac.jp/tjcas2019/reports.html>

実をいうと4カ月経ってしまったということを抜きにしても、学会期間中の記憶は少々曖昧である。短期間に、自身の処理能力を超えた大勢の人間に出会い、多くの物事に対応したせいで、脳内記憶領域への書き込みが追いつけなかったのだろう。上述の通り、報告書の趣旨は「学会がどのようなものであったかの報告を、主観を交えて記録に残す」である。であれば、準備期間のを中心にして、学会運営に関わる感想や反省などをまとめても、趣旨に大きく反することはなかろう。と都合よく解釈して、聞くも涙、語るも涙、聞くに堪えない言い訳オンパレードを、読み物として面白いように若干の脚色を加えつつ、恥を忍んで記載することにする。まっとうな学会運営をしたい方は、「反面教師」を前提にお読み頂くことをお勧めする。思いつくままに綴ったら結構な長文になってしまった。一言一句をおっかければ胃もたれすること請け合いである。

モチベーション保存則：孤立系のモチベーションの総量は変化しない

図1のようなツイート履歴が残っている。2019年08月19日02:04、学会初日前日の深夜である。運営に関わる準備をすべて終えて帰宅し、思い出したように自身の2泊3日宿泊準備を済ませ、寝る直前に書き込みをしたらしい。最初と最後で同じ文言が重なっていることを校正する余裕はないが、ツイッターをチェックする程度には元気だったようだ。

この時点で、事前に準備すべきことは完遂し、あとは現地に行きさえすれば何とかなるだろうという心境になり、張りつめていた糸が一度、完全に切れた記憶が蘇る。

一般的なモチベーションの推移として、図2の黒線のように学会に向けて徐々に上がり、学会期間中にピークがくると思われる。しかし、今回の私のTJCASに対するモチベーションは、図2の赤線のように、準備の大詰め期間にピークに達し、終わった瞬間ガス欠を起こした。このことが、学会期間中の記憶が曖昧なことに一役買っているに相違ない。なお、モチベーション量の時間積分が一定であると仮定した場合、準備をいろいろ頑張る必要がある事務局

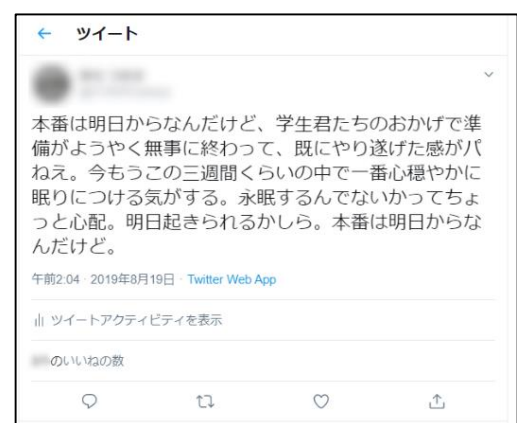


図1：ツイッター履歴

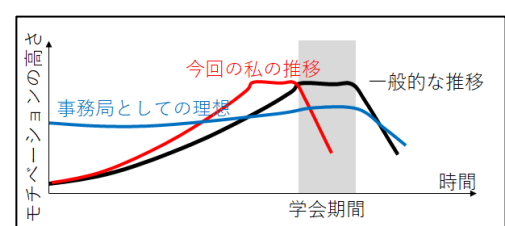


図2：モチベーションの推移

としては、たとえ学会期間中のモチベーションが下がったとしても、もっと早い時期から高いモチベーションを発揮するのが理想的であると思う（図2の青線）。

念のため言い訳をしておくとして、2019年1月頃にはそれなりにモチベーション高く頑張っていた。学会運営マニュアル[1][2]を見つけ、参考にしながらリスト[3]を作ったり、計画を立てたりしていたのだ。2019年4月に入った瞬間、計画はすべて吹っ飛んだ。[1]-[3]の存在を思い出したのは学会終了後、しばらく経ってからである。

[1] <https://www.hiroshima-u.ac.jp/system/files/15672/confmanu20151030.pdf>

[2] <http://web.sanin.jp/p/bureau/20/>

[3] <http://annakwn.sakuraweb.com/tjcas2019/admin.html>

「他力本願」：「他人任せ」はネガティブな誤用であり、本来はありがたい仏教用語である

2019年3月31日、石川信宣氏が退職された。大所帯小林研究室の事務仕事を一手に引き受け、先生方や学生からの信頼も厚い大ベテランである。世界遺産で国際学会を行うための会場を借りるという偉業を成し遂げた、TJCASの功労者でもある。

氏の退職に伴い、研究室の事務仕事を私が引き継いだ。私も前任校では大学の事務仕事はそれなりに行っていたし、2018年度の一年間、氏が涼しい顔でこなしているのを近くで見ているのを大したことないと思っていたが甘かった。群大特有の事務ルールにまだ慣れていなかったことに加え、物量が前任校のとは比べ物にならないため、手続きにいちいち時間が取られ地味につらかった。学生が「ちょっと日帰りで出張」といっても、それが「15人で」ともなれば塵積、書類をそろえるのに半日はかかるのである。今は慣れたので極簡単にできるが、4月当時は日本の「書類に印鑑」文化を本気で呪ったものである。

その辺詳しく書くと脱線するので、「4月からTJCAS以外の事柄でとても忙しくなった」という程度の認識で、以下読み進めて頂きたい。

私は学生に何かを頼むことが苦手である。「優しい人だから学生を大事にしているんだろう」と好意的に解釈してもらえることもあるが、その実、誤解を恐れず書くが、学生を信じていないと言った方が正しい。

昔こんなことがあった。学会運営のアルバイトとして来てもらった学生に「口頭発表のタイムキーパー（ベル係）をお願いします」と一言告げてベルと時計を渡した。自動で時間を測ってベルを鳴らしてくれるようなアプリケーションソフトウェアが、まだ普及していない時代のことである。数時間後に様子を見に行くと二教室並列で行われていた口頭発表が、二教室とも大幅に時間超過していた。後で事情を聞いたら二教室に割り振ったベル係二人が異口同音に「発表や議論を妨げてはいけないと思って、指定の時間がきてもベルを鳴らせなかった。発表や議論が途切れた瞬間を狙ってベルを鳴らしていた」と宣ったのである。

この極端な例を以て「全ての学生を須らく信ずるべからず」とするのはあまりに早計である。たまたま、学会の口頭発表に不慣れな二人をベル係にしまっただけのことである。実際、他の学会では「ベル係お願いします」の一言だけできちんとタイムキープしてくれる学生がほとんどであった。

しかし、二人が同様の認識違いをしていたこの件は、妙に印象的だったためよく覚えている。「自分の認識が他人の認識と一致するとは限らない」ことを実践で教えてくれたことは、自分にとって大きなメリットでもあった。ただ、この件以来、学生に手放しで何かを頼めなくなったこともまた事実である。

TJCASに限って言えば、小林研の学生は皆優秀であるし、学会慣れしているから、上記のような心配はなかったかもしれない。実際、小林研学生諸姉諸兄は事前準備の段階から非常によく働いてくれたし、当日も自分の発表に加えて運営に関わることで活躍してくれた。もっと早い時期から頼っていれば、私がやるよりずっと素早く・良い物を・安く・スムーズに成し遂げてくれただろう。たとえば、「メイン会場にプロジェクタとスクリーンを用意してください」と一言言えば、暗幕のない明るい広い部屋に研究室所有のご家庭用プロジェクタと80インチスクリーンを設置しても後ろの席からは文字が読めるレベルで投影はできないことを当然想起し、会場の広さと明るさを調べ、必要なスクリーンサイズとプロジェ

クタの輝度を見積もり、200 インチレベルのスクリーンと業務用プロジェクタを必要時刻に搬入してくれるレンタル業者を探し、そのスクリーン高さが会場天井につかえないか・会場ドアから搬入できるかを会場とレンタル業者に確認し、200 インチを投影するのに必要なプロジェクタ・スクリーン間距離と客席におけるプロジェクタ排熱範囲を確保し、コンセント位置と最大許容電流を会場に確認し、必要長さのVGA および HDMI ケーブルや電源ケーブルなど必要物品を手配してくれたに違いない。

石川氏と話しているときに、小林先生は東大の将棋部で、盤面全体の駒の動きをよく見ている、百手先・先手先を読んで駒を動かしている、あれは誰にでもできることではない、という話題が出た。実際、学内外の大勢の方に適材適所な役職を割り振ったこと、割り振った以上はどんと構えて細かいことを任せてくださること、できなかったことを寛大に許してくださること、失敗を見事にフォローして下さることなどを今回目の当たりにし、素晴らしい大将であり、軍師であり参謀であると再認識した。

適材適所といえば、Financial Chair の弓仲先生には、銀行口座や PayPal アカountの開設、参加費に関わるかい問い合わせの対応の一切を担って頂いた。流れで群大・日光間の物資運搬や、会期中の受付や細かいアナウンスなど、Financial Chair の範疇を超えて助けて頂いた。運営事務局の最大の功労者は間違いなく弓仲先生である。

高橋俊樹先生は、私は運営に手一杯でほとんど携われなかった Special Session を見事に采配してくださった。会期中に Special Session に呼びつけた知人をほとんど放置するというとんでもない失礼を犯したが、後で知人に聞いたところによれば、大勢と会話できて有意義であったとのこと。俊樹先生と関係の皆様や俊樹研の学生さんたちに深く感謝したい。

私は緊張も相まって、学会一日目の夕方くらいから胃が飯を受け付けず、エネルギー不足のため二日目・三日目は学生スタッフにまともな指示を出せなかった自覚がある。高橋洋平さんがいなかったら、二日目・三日目の運営は立ち行かなかっただろう。たくさんの業務でお忙しい中、事前準備から当日の運営まで、洋平さんには並々ならぬお世話になった。設営の力仕事に協力してくれた小林研・栗田研・小山高専久保研の学生諸兄にも、合わせて感謝する。

小山高専といえば、可愛らしいお嬢様を二人も連れて来てくださった久保先生は、特に一日目のイベントをおおいに盛り上げてくださった。とくに過飽和状態なのに核がなくて凝結できなかった一日目のイベントの企画段階において、エアロゾルのような効果をもたらしてくださった有難い方である。

学生に手放しで何かを頼めなくなったと先に書いたが、「いい感じをお願いします」の一言で、本当にいい感じに事を運んでくださった先生方はその対極である。特に羽賀先生（一日目）、栗田先生（二日目・三日目）は、事務局が喋るべき台本にはない細かいアナウンス（当然英語）を私の代わりにたくさん喋ってくださってとても助かった。

TJCAS と直接関係ないので詳細は割愛するが、4月から重めの学科の委員になったこともキツかった。委員の仕事や学科の仕事を交代してくれた先生方、細かい仕事を手伝ってくれた学科事務室、色々気遣ってくれた方々のおかげで何とかこなすことができた。

私は大勢の人に足を向けて寝られない。じきに直立、更には倒立して寝ことになるだろう。

余談であるが図3は、会期を終えて群大に無事帰ってきた安堵感と感謝に任せて思わず抱き着いた学科事務室のお姉さまとの写真である。弓仲先生が撮ってくれた TJCAS 関連の写真の中で、一番気に入っている。

あとは個人的に、軽くて静かな台車・ポスタースタンド・電源ドラムなど、学会に使いそうな物資を譲ってくれた友人にも感謝したい。私が当初思い付きもしなかった物品を色々送ってくれたおかげで、学会直前に「うわっ これ送っておいてもらって助かった」と何度思ったかわからない。ありがとう。



図3：学会終了後

チョコロQはF1マシンの夢を見るか

話しを一ページ前に戻そう。何故、私は学生を頼らなかつたか。ここで「学生もそれぞれ忙しいから

あまり負担をかけてはいけないうちで…」とか何とかそれっぽいことを書けば「まあなんて優しい人なんだろう」と騙され…じゃなくて、勘違いしてくださる方もいらっしゃるかもしれない。実際はそんな崇高な思いは微塵もなく、これまで何度も学会・シンポジウムの運営を致命的な問題なくこなしてきたことで、なんというか一言で言えば、驕っていたのである。

今回は、過去と異なること、すなわち驕ってはいけないうち要素が大きく4つあった。

一つ目は、会場が「ホーム」ではないことである。多くの方から聞いたセリフであるが、私も日光を訪れたのは「小学校の修学旅行以来」である。恥を忍んで書けば「日光って栃木県でしたっけ？ 茨城県でしたっけ？ 福島県でしたっけ？」というレベルである。会場の場所も設備も交通事情も分からないため、現地を知ることによって予想外の時間が費やされた。

二つ目は、学会やシンポジウムのために作られたわけではない会場での開催となったことである。プロジェクタ・スクリーン・机・椅子の設置から検討が必要な経験は初めてであった。ポスター板にしても、大学・大きなホテル・文化センターなどであれば簡単に設置できたであろうが、如何せん世界遺産である。畳サイズの重たい板を何枚も持ち込んで大丈夫なのか、考える必要があった。

三つ目は、事務局の中核を引き受けたのは初めてだったことである。今まで行ったのは「バイト学生を集めて当日の指示を出す」「会場の機器操作」「貼り紙など前日の会場設営」「ホームページ更新」など、ある程度かみ砕かれた単一の仕事のみであった。「学会の運営」という上流工程に携わったのはこれが初めてであり、その仕事量を見誤った。

四つ目は、「国際学会」だったことである。海外からの送金を受ける手段の用意、問い合わせへの対応やホームページへの情報記載がすべて英語であること、宗教上食べられない食材に対する配慮など、過去に経験のない項目が頻出した。

私のスペックは、鼻目に見てもチョロ Q である。動力はぜんまいばね。筐体はプラスチック。エンジンなどという贅沢なものは搭載していない。車道を法定速度で走ろうものなら、ぜんまいはぶち切れ、筐体は爆散するに違いない。

周りを見回してみれば、高性能なバイクや自動車がたくさん法定速度ぎりぎり爆走している。皆さんそれぞれ自身の荷物がある中で、チョロ Q の荷物を一つずつ一つずつ請け負ってくれた。感謝に堪えない。なお、我々が General Chair の小林先生に至っては、そのお仕事ぶりを見るにきっと、一般道路を走るにはオーバースペック気味の F1 マシン並のエンジンを積んでいらっしゃるのだろう。

荷物をどこに持っていか把握しているのがチョロ Q である以上、ボトルネックになることは避けられない。今回のことで、エンジンがほしい、せめてスーパーカブになりたいと切実に願う。高速道路は走れなくて構わない。重心低く、たくさんの荷物を安定して運べるようになりたいと思った。

パンが食べたいならパンを買えばいいじゃない。何故小麦粉を買うのかしら。

チョロ Q の少ないスペックを有効に使うためには、無駄な仕事は避けたいところである。論文投稿・査読システムおよび参加者の登録システムを内製して、無駄な仕事を全力で作上げたことを反省しておきたい。内製といってもゼロから組み上げたわけではなく、群大でも使われている Moodle というシステムを、レンタルしたサーバにインストールし、TJCAS 仕様に設定をただけのことではある。

サービスイン当初の必要機能と、想定されるユーザの操作の見積もりが甘く、運用後に仕様変更が相次ぎ、結局最新のデータは手元の Excel で管理するという愚行を犯したため、内製のメリットは全く生かせなかった。それであれば既存サービスを使うべきであった。多くの利用者には「初めて見るシステムを操作する」というストレスを与えることになり、管理者にとっては管理の負担が増えただけである。

最大の愚行は、論文投稿用 Moodle と査読用 Moodle を別建てしたことである。もともと Moodle を使ったのは、論文投稿（投稿者が PDF ファイルをアップロードする）・査読（査読者がコメントを付ける）・投稿者へのフィードバック（査読者のコメントを投稿者が確認する）・再投稿が一元管理できるからではなかったのか。何のための Moodle か。万が一、Moodle を教えてくれた前任校の元上司に今回の仕儀がばれたら膝詰め説教3時間コースである。投稿用 Moodle ・査読用 Moodle 間でデータを移し変えてくれた学生君達には感謝してもしきれない。

よほど特殊なことをしたいのでない限り、単発のイベントに内製システムを立てるは、管理のための労力がかかりすぎることを学んだ。論文投稿・査読については、EasyChair (<https://easychair.org/>) というサービスを教えてもらった。参加者管理については、Google Form か何かのアンケートフォーマットを使えば充分である。

すべての学会運営事務局に、幸あらんことを

さて、いかに主観を交えてよいとはいえ、皆さんそろそろ「俺語り」にうんざりなさっている頃合いであろう。ここで、将来自分がまた学会の運営に携わるときのために、反省点をまとめておく。高スペックな読者諸姉諸兄にとっては言うまでもないことばかりと思うが、チョコロ Q にとっては重要な気づきあるいは再認識であった。今しばらくお付き合い願いたい。

- ・ 早い時期から計画的に準備を進めること。
- ・ 学生を含めた周りの人に、仕事をうまく割り振ること。
噛み砕いて指示をするのが厄介なら、ある程度の権限とともに素材のまま丸ごとお任せすること。
- ・ 残「実日数」ではなく、残「営業日」を考えること。土日とお盆は一般的にはお休みである。
- ・ 個別対応するより前に、全体向けにアナウンスを出すこと。
- ・ 自身のスペックと、仕事量を正確に見積もること。
他の仕事ともバランスをとりながら計画的に準備を進めること。
- ・ 業者さんや現地の人と定期的にコミュニケーションすること。
慢性的に混雑する道路とそれに対する抜け道を教えてもらったり、「折り紙」のイベントに助言してもらったり、現地の人ならではの知見に随分助けられた。綱渡り運営に付き合わせてしまって申し訳ない限りである。
- ・ 致命的にやばいことから先に対処すること。
学会一週間前の時点で、ここに書いたら関係者が絶句するようなやばい問題があった。今思い出しても冷や汗ものである。「時効！時効！」と笑って話せる日が来るまでは、私の胸一つに留めおくことにしたい。

合わせて、「良かったこと」もまとめておきたい。

- ・ 命や金に関わる事故、器物損壊などが起こらなかったこと。
- ・ プロジェクタやポスター板が当日会場に届かないなどの致命的な問題は起こらなかったこと。
- ・ お友達がたくさんできたこと。
特に TJCAS 関係の先生方（西尾先生、荒井先生、上手先生）と知り合いになれたのは嬉しかった。エネルギーで豪放磊落で、でも締めるべきところはきちんと締める、頼りになる、とても魅力的な先生方である。

ここまでに書いていない「有難かったこと」を二点。

- ・ 寛大に予算を使わせてもらったこと。
物品の購入・レンタル・運搬など事務局の運営を円滑にするために、言い値を出して頂けたのは有難かった。たとえば「業務用の高輝度なプロジェクタのレンタル」など必要性を理解してもらいにくい案件に対して疑義を唱えられたら、より大変だったと思う。
- ・ 参加者の皆さんがとても寛大だったこと。
多くの方が、会場が世界遺産である目新しさを理解し、楽しんでくださった。大学・大きなホテル・文化会館などでは起こりえない不便さに対して、「けしからん」ではなく「ないならばないで構わん」という姿勢でいてくださったことに、心から感謝したい。

最後に、本記録は「反面教師」であることを再度強調して、締めとしたい。きちんとした学会運営のためには、以下のサイトをお勧めする。

<https://www.hiroshima-u.ac.jp/system/files/15672/confmanu20151030.pdf>

<http://web.sanin.jp/p/bureau/20/>

以上